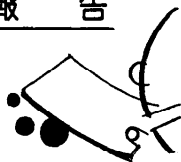


報 告



創立 20 周年記念事業報告†

20 周年記念事業実行委員会‡

1. は し が き

本報告書は創立 20 周年記念事業として行われた記念祝典（昭和 55 年 5 月 20 日）、記念大会（昭和 55 年 5 月 21 日から 5 月 23 日までの 3 日間）、記念論文の公募、記念出版および記念会誌の発行につき概要を報告するものである。

情報処理についての学術とその応用は、ある意味ではその緒についたばかりであり、今後無限の発展の可能性を蔵しているといえよう。このことを反映して、本学会 20 周年記念祝典には官民をあげてのご支援とご激励をいただいた。なかでも 4 省庁各大臣のご祝辞ならびに学界・業界の会長、総裁の方がた御自らのお祝いの言葉を多数いただき得たことは、まことに感謝にたえない次第である。

創立 20 周年記念事業は、ほぼ所期の目的を達し、有意義に実施することができた。多数の会員が記念事業に参加され、随所にその実力を示された賜物ということができよう。

最後に、記念事業を遂行するに当って示された、会員各位ならびに事務局の方々の温かいご援助に対し深く感謝する次第である。

2. 記 念 祝 典

昭和 55 年 5 月 20 日（火）、東京都千代田区東京会館 9 階ローズルームにおいて、3 時から記念式典、4 時から 5 時 30 分まで記念講演会、6 時から記念祝賀会が、来賓、会員の多数の参加をえて、厳粛に、あるいは和やかに滞りなく行われた。

その模様の大略は以下の通りである。

(1) 記 念 式 典

午後 2 時 40 分より招待者および一般会員参加者が逐次席につき、ついで記念論文受賞者（入選 4 編 8 名、佳作 4 編 6 名）ならびに永年にわたり学会事業に

協力された各社社長が最前列に着席した。

正面中央の〔創立 20 周年記念式典—情報処理学会〕の大看板の下に設けられた舞台上の左側に、小林会長、高橋副会長、田中副会長が着席すると、猪瀬委員長が文部省、科学技術庁、通商産業省ならびに郵政省の各大臣を舞台上の右側に先導し、参会者全員がその席につくや、平澤常務理事の司会により、高橋副会長の開会の宣言が行われ、式典が始められた。

● 会 長 式 辞

小林会長が式辞に立ち、まず当日ご臨席の 4 省庁大臣を始め、ご出席の来賓、会員に深く感謝し、つづいて「創立 20 周年を迎えた若い学会として、1980 年代の使命を自覚するとともに、その責務を全うすることに努力する」旨を述べた。

● 記念事業経過報告

ついで猪瀬委員長から、昭和 50 年 7 月より 5 年間にわたりすすめられてきた 20 周年記念事業の概要につき報告があった。すなわち、学会創立 20 年の成果のうえに立ち、(1) 記念論文の公募、(2) 新版情報処理ハンドブックの発刊、(3) 情報処理叢書の刊行、(4) 会誌「情報処理」記念特集号（第 21 巻 5 号（1980 年 5 月号）および英文誌「Journal of Information Processing」Special Issue (Vol. 3, No. 3 (1980)) の発行、(5) 昭和 55 年度全国大会を記念大会として開催、(6) 第 8 回世界コンピュータ会議 (IFIP Congress 80) の東京 (10 月 6～9 日)、メルボルン (10 月 14～17 日) の両大会に、記念論文入賞者の参加にたいする援助など、若い会員に向学への刺激を与える一方、全会員に何等か裨益し、あわせて学会の将来の発展に寄与しよう多岐にわたる記念事業をすすめてきた旨をのべた。

● 来 賓 祝 辞

つづいて来賓の祝辞にうつり、文部省以下 4 省庁の大臣の祝辞が、逐次中央演壇で朗読された。ここで特筆すべきことは、各省庁関係者のご協力により 4 大臣の祝辞を賜ったことであり、本学会にとってまこと

† A Report of the 20th Anniversary

‡ 委員長 猪瀬 博

に光栄とするところである。

各大臣からの祝辞はいずれも各省庁所管の情報処理に関する政策についての現状と将来展望ならびに本学会の今後の発展への期待が述べられた。今さらながら情報化社会の到来と各省庁のこれに対する熱意がうかがえるとともに、本学会の社会的使命に思いを新たにさせられた。(各祝辞は本報告の末尾に収録)

● 祝電紹介、感謝状贈呈

電子通信学会など3学会からの祝電披露があった後、本学会の業務に多年にわたり協力された三美印刷(株)以下6社に感謝状が贈呈された。小林会長から各社の社長の方々に對して感謝状を朗読のうえ記念品(花瓶)と共に手交し、懇に永年にわたるご協力に謝意を表した。

● 表彰状授与

ついで記念論文の表彰状の授与が行われた。

はじめに、相模論文選考委員長から記念論文選考経過報告がなされた。

表彰式は、論文各編ごとに行われた。会長が表彰状を朗読し、満場惜しめない拍手の中に、各編の第1著者に対し順次表彰状と目録が授与された。受賞者は関東地区以外に名古屋、京都、熊本、鹿児島在住にいたり、全体的に本学会の会員が、全国に広汎になりつつあることがうかがわれた。

最後に永年勤務職員として、坂元真澄氏が表彰された。

つづいて高橋副会長の閉会の辞により記念式典のすべての行事を定刻4時に滞りなく終了した。

記 念 式 典 次 第

ア. 開会の辞	高橋副会長
イ. 会長式辞	小林会長
ウ. 記念事業経過報告	猪瀬実行委員長
エ. 来賓祝辞	文部大臣 谷垣専一殿 国務大臣 科学技術庁長官 長田裕二殿 通商産業大臣 臨時代理国務大臣 正示啓次郎殿 郵政大臣 大西正男殿
オ. 祝電紹介	電子通信学会会長 小口文一殿 電気学会会長 上之國親佐殿 日本オペレーションズ・リサーチ学会会長 小林宏治殿
カ. 感謝状贈呈	三美印刷株式会社 社長 山岡景哉殿 株式会社 中外広業社 社長 遠山健人殿 株式会社 オーム社 社長 三井正光殿 株式会社 西武洋紙店 社長 柴田正勝殿 有限会社 巧芸社 社長 増山 昇殿 三協印刷株式会社 社長 柏木俊吾殿
キ. 表彰状授与	
記念論文	選考経過報告 相模選考委員長
表彰状授与	受賞者全員

永年勤務職員表彰状授与 坂元真澄氏
ク. 閉会の辞 高橋副会長

(2) 記 念 講 演

記念式典に引続き澤田事業担当理事の司会で元文部大臣永井道雄氏の記念講演が行われた。

朝日新聞客員論説委員として、またパリのユネスコ本部での2年間にわたるコミュニケーション問題検討国際委員会の日本代表委員として同委員会の審議内容を背景にした「新世界情報秩序の確立」と題する、国際的な広い視野から世界の情報秩序の新しい在り方についての有益な講演であった。

講演後、司会者の好リードで「情報」あるいは「情報処理」の基礎概念その他につき活発な質疑応答があり、講演内容の理解をさらに深めることができた。(講演内容の詳細は学会誌「情報処理」第21巻11号(1980年11月号)に掲載。)

(3) 記念祝賀会

祝賀会は坂井前副会長の司会進行役として進められた。

まず小林会長の開会の挨拶につづいて、日本学術会議伏見康治会長、日本電信電話公社秋草篤二総裁、日本電子工業振興協会小林大祐会長ならびに IFIP ボビリエ会長(IFIP 元副会長後藤英一氏代説)がそれぞれ各学業界の立場から軽妙の中にもまことに核心をつくお祝いの言葉が順次述べられ、満場の盛んな喝采が寄せられた。(お祝いの言葉は本報告の末尾に収録)

このようにして、会場の雰囲気もいよいよ盛り上がり、華やかな中にも和気あいあいのざわめきが残る中で、名誉会員山下英男初代会長の音頭で乾杯がなされ、パーティ本番の懇談に移った。

出席者は招待された賛助会員、歴代役員を始め編集委員、研究会・研究委員会の幹事、委員ならびに一般会員など277名にのぼった。数カ所にしつらえられたテーブルを中心に来賓あるいは歴代会長を囲み、20年前にわずか300名で発足して今や14,000名を擁する大きな学会に至った足跡をしのび、あるいは情報処理の将来を展望しながら、お互い時の経つのも忘れて新旧の歓談に花を咲かせた。

パーティも最高潮に達した8時30分、司会者の紹介で名誉会員後藤以紀第2代会長が中央演壇に上り、学会の今後の発展を祝した万歳の三唱に参会者一同が唱和して、本日の記念祝典の幕をめでたく閉じた。

(4) そ の 他

① 祝典ご案内

上記(1)～(3)の行事は、会員には一般公開とし、会誌「情報処理」により公告したほか、招待状および案内状を発送した。なお、記念祝賀会は、来賓・招待者以外は会費制(3,000 円)とした。

招待状は、歴代学会役員、官公庁、関連学会、IFIP 80、記念事業関係委員等約 270 名の方々に、案内状は、学会各種関係各委員会委員、記念論文査読委員、賛助会員等約 380 名の方々に発送した。招待状、案内状の発送枚数および出席者数は次の通りである。

	発送枚数	記念式典	記念講演	記念祝賀会
招待状	272	137	143	159
案内状	337	46	62	51
一般	—	15	25	67
計	609	198	230	277

㊦ 記念ネクタイピン

記念ネクタイピンを 700 個製作し、当日招待した方ならびに、祝賀会出席者に贈呈した。

3. 記念大会

昭和 55 年 5 月 21 日(水)から 5 月 23 日(金)までの 3 日間、東京都千代田区平河町周辺の 5 会館 12 会場で行われた。

前回大会から 10 カ月程度しか経過していないため、当初は論文発表数が減少することが懸念されたが、621 件という今までの最高の発表数であり、活気ある記念大会となった。

会場には、日本都市センター・ホール、麹町会館、砂防会館、社会文化会館、全共連ビルを借用した。

記念大会の行事は次の通りである。

① 特別講演

ア 講演者 林雄二郎氏(未来工学研究所)

イ 演題 社会の成熟化と情報化社会

しかしながら、上記を予定していた林氏が急病のために、高橋副会長が「学会 20 年の歩み」(創立 20 周年記念特集号に収録の報告)について講演された。

㊦ 招待講演

ア Dr. B. O. Evans (IBM)

Computers—Past, Present and Future

(「情報処理」第 21 巻 9 号(1980 年 9 月)に収録)

イ 坂井利之君(京大)

情報システムにおける音声の認識と合成

(「情報処理」第 21 巻 8 号(1980 年 8 月)に収録)

㊦ パネル討論

分散処理の効用と問題点

(司会) 元岡 達君(東大)、綾日天彦君(三井造船)

戸田 巖君(横通)、三巻達夫君(日立)、

渡部 和君(日電)

㊦ 入賞した 20 周年記念論文

一般講演の該当するセッションの中で発表した。

㊦ 大会委員会の構成(敬称略)

委員長(副会長) 高橋 茂

副委員長(事業担当常務理事) 石井善昭

委員(事業担当理事) 三浦大亮、河野隆一、澤田正方

(編集担当理事) 首藤 勝、川崎 淳、飯村二郎、三井 信雄

4. 記念論文

第 207 回理事会(53.1.19)の承認を得て、第 1 回公告を「情報処理」53 年 3 月号で行って以来、学会誌で数回公告すると共に、ちらしを配布し周知方をはかってきた。54 年 8 月 31 日に論文受付を締切り、54 編の論文を受付けた。査読・選考の結果、第 10 回実行委員会および第 230 回理事会(55.1.17)で 8 編の受賞論文を決定した。

(1) 選考方法

① 応募資格

第 1 部門(昭和 54 年 3 月末現在の学生会員または 30 才未満の正会員)および第 2 部門(第 1 部門以外の正会員)にわけて審査した。

㊦ 一次選考

論文誌編集委員会を中心として、記念論文査読委員会を組織した。査読結果は集約されて、記念論文選考委員会に報告され、選考委員会は討議の上受賞対象論文を 18 件にしばった。

㊦ 二次選考

受賞対象論文について、代表的な 5 分野ごとにわかれて選考委員会委員が再査読し、受賞論文を 12 件にしばった。

(第 229 回理事会に中間報告)

㊦ 最終選考

第二次受賞対象論文について再々査読を行い、結果についてさらに全体的な討議を行い、受賞論文を決めた。

受賞論文についてさらに討議を加え、入選論文ならびに佳作論文の候補を決め最終選考案とした。

㊦ 入選論文ならびに佳作論文の決定

記念論文選考委員会の最終選考案に基づき、第 10 回実行委員会および第 230 回理事会で入選論文ならび

に佳作論文を決定した。

(2) 入選論文ならびに佳作論文

第1部門

	著 者	論 文 題 名
入 選	武藤佳恭・池田政弘(慶大)	フォールト・トレラント・ゲートの提案
佳 作	丸山文宏(富士通)	ハードウェアの機能設計段階における検証

第2部門

	著 者	論 文 題 名
入 選	村島定行(鹿児島大) 久原秀夫(八代高専)	リーマン面上のグリーン関数の重ね合せによる二次元ラプラス方程式の近似解法
	松山隆司・長尾 真(京大) 穂坂 衛・木村文彦(東大)	航空写真の構造解析 3次元自由形状設計制御理論とその手法
佳 作	二宮市三(名大)	適応型ニュートン・コース積分法の改良
	大須賀節雄(東大)	次世代計算機システムに関する一考察—知識型システムの提案—
	紫合 治・岩元亮二 藤林信也(日電)	統一的设计方法論に基づくソフトウェア設計システム

(3) 発表その他

ア 選考結果は記念式典において公表し、受賞論文の表彰を行った。また、記念大会の該当するセッションの中で受賞論文の講演発表を行った。

イ 「情報処理」記念会誌(昭和55年5月号)に“記念論文の公募と選考結果について”を掲載した。

ウ 受賞外論文のうち、一般論文になりうる24件に対し、“査読者のコメント”を渡し、一般論文としての再投稿をすすめた。

(4) 表 彰

ア 各入選論文の著者の1人(原則として第一著者)に対して IFIP Congress 80 登録費および豪州大会参加費を学会が負担する。

イ 各佳作論文の著者の1人(原則として第一著者)に対して IFIP Congress 80 登録費を学会が負担する。

ウ 受賞論文のすべての著者に対する表彰状および記念品(額)を授与した。

エ 受賞論文1編につき論文別刷100部を贈呈した。

(5) 選考までの組織・構成

① 記念論文小委員会

記念論文の計画作成・実施に当たった。

(センター) 相磯秀夫(慶大)、鳥居宏次(電総研)、山田 博(富士通)、伊吹公夫(通研)、木村 泉(東工大)、村上国男(通研)、田中英彦(東大)、益田隆司(筑波大)、発田 弘(日電)

電)

地方) 樹下行三(広大)、矢島脩三(京大)、鳥居達生(名大)、都倉信樹(阪大)、牛島和夫(九大)、稲垣康善(三重大)、宮崎正俊(東北大)、池田克夫(筑波大)

② 記念論文査読委員会

論文誌編集委員会(委員長相磯秀夫以下135名)を中心として組織・構成し、記念論文の査読と第一次選考案の作成を行った。

③ 記念論文選考委員会

記念論文査読委員会の査読に基づき、受賞論文の選考を行った。構成は次の通りである。

委 員 長 相磯秀夫(慶大)

(数 理) 山下真一郎(富士通)、名取 亮(電通大)、池野信一(電通大)、戸川卓人(日大)

(人 工 知 能) 榎本 章(東工大)、米澤明憲(東工大)、棟上昭男(電総研)、和田英一(東大)

(ハードウェア) 内田俊一(電総研)、石井 治(電総研)、田中英彦(東大)、発田 弘(日電)、村上国男(通研)、山田 博(富士通)

(ソフトウェア) 首藤 勝(三菱)、片山卓也(東工大)、鶴保征城(電電)、飯村二郎(通研)、鳥居宏次(電総研)、中田育男(筑波大)、野口健一郎(日立)

(シ ス テ ム) 三上 徹(日電)、川崎 淳(日立)、伊吹公夫(通研)、三上晃一(IBM)、佐川俊一(国鉄)

5. 記 念 出 版

(1) 情報処理叢書の出版

① 目 的

学会の諸活動すなわち研究会等の活動と密接な関連をもって、最新の情報処理の技術を紹介し、日本の情報処理分野の向上に役立たせる。

② 編 集 方 針

ア 情報処理における特定分野の最新の技術、および今後発展が予想される技術分野を、その思想を中心として読者に理解させる。

イ 内容の対象は、分野によっては教科書的であるもの、サーベイ的であるものも存在し、同一の対象は統一することはしない。

ウ 対象読者の知的レベルとしては、理学部、工学部の学生諸君を標準とする。

③ 規 模

ア 出来上り A5判、9ポイント、1段組、約100頁

最新技術を速やかに世に出すため、比較的小冊子とする。

イ 第1期(昭和55年5月出版予定)6冊、第2期(昭和56年出版予定)7冊にわけ、それぞれ発行することとしたが、若干おくれしている。

④ テーマおよび著者の選定

第1期分については第222回理事会(54.4.19)、第

2 期分については第 231 回理事会 (55.2.21) の承認をえて、第 1 期分のうち 4 巻を既刊、ほかは編集中有である。

第 1 期

- (1) 医療情報学 (開原成允, 稲田 敏)
- (2) コンピュータ・ネットワーク技術 (猪瀬 博, 苗村憲司, 田畑孝一, 浅野正一郎)
- (3) ソフトウェア工学(I) (國井利崇, 齊藤信男, 原田賢一)
- (4) データベースマシン (植村俊亮, 前川 守)
- (5) 記号処理の基礎と応用 (後藤英一, 戸島 照)
- (6) データベース理論 (有澤 博)

第 2 期

- (1) ソフトウェア工学(II) (國井利崇, 齊藤信男, 原田賢一, 大野 俊郎)
- (2) データベースの論理設計 (穂鷹良介)
- (3) オペレーティングシステムの性能解析 (益田隆司, 亀田壽夫, 高橋延正)
- (4) 計算機システム性能解析の実験 (三上 徹, 堀越 彌)
- (5) 情報意味論 (関 一博, 伊藤貴康)
- (6) 理論装置の CAD (樹下行三)
- (7) 数式処理 (佐々木建昭, 渡辺準郎)

㉖ 20 周年記念叢書委員会

高島堅助君を委員長とする (第 195 回理事会) 20 周年記念叢書委員会を構成し、学会の出版委員会の主管のもとに、編集に当たっている。その構成は次の通りである。

- 委員長 高島堅助 (阪大)
幹事 信国弘毅 (日電), 高平 毅 (通研)
委員 開原成允 (東大), 苗村憲司 (通研), 尾上守夫 (東大), 植村俊亮 (電総研), 関 一博 (電総研), 竹内都雄 (通研), 原田賢一 (慶大), 有澤 博 (横浜国大), 益田隆司 (筑波大), 加納 弘 (日立), 田島守彦 (電総研), 有山正孝 (電通大)

(2) 新版情報処理ハンドブックの出版

① 目的

現情報処理ハンドブックが刊行されて以来、情報処理分野の進歩はまことに目覚ましい。20 周年記念事業の一環として全く新しい構想のもとに、最新の学問・技術の成果をとり入れたハンドブックを刊行し、今後の情報処理技術に関して權威ある指針たらしめ、わが国の情報工学および情報処理の発展に寄与する。

② 編集方針

ア 内容は情報工学および情報処理の全分野を一応網羅するものとする。

イ 最近、特に進歩の著しい分野については積極的にとり入れる。

ウ ある分野についてその専門でない者が読んで概念がつかめ、さらに深く進むための手引きとなることを目標とする。

エ 読者は、情報処理に関係する大学の学部卒業者程度を対象とする。

③ 規模

ア 出来上り B5 判, 8 ポイント, 1,170 頁

イ 発行 昭和 55 年 3 月, 定価 20,000 円,

会員予約 特価 15,500 円

(昭和 55 年 2 月末まで)

㉗ 新版情報処理ハンドブック委員会

北川敏男君, 広田憲一郎君をそれぞれ委員長および副委員長とする (第 195 回理事会) 新版情報処理ハンドブック委員会を構成し、編集、出版に当たってきた。その構成は次の通りである。

委員長 北川敏男 (富士通)

副委員長 広田憲一郎 (未来工研)

幹事 重島興三 (日立), 大前義次 (日電), 落合 進 (国鉄)

委員 飯塚 雅 (電総研), 石田晴久 (東大), 大庭弘太郎 (日電),

岡田康行 (日立), 海宝 顕 (IBM), 片山卓也 (東工大),

近谷英昭 (国鉄), 竹下 孝 (IBM), 鶴保証城 (日電),

所 真理雄 (慶大), 発田 弘 (日電), 穂鷹良介 (筑波大),

三輪 修 (富士通)

6. 記念会誌

(1) 会誌「情報処理」

① 会誌第 21 巻 5 号 (昭和 55 年 5 月号) を「創立 20 周年記念特集号」とし、総 190 頁で編集した。

② 目次

創立 20 周年を迎えて一會長あいさつ—小林宏治
Message from the IFIP President

P. A. Bobillier

学会 20 年の歩み

高橋 茂

情報学の展望と課題

穂坂 衛

記念論文の公募と選考経過について

相磯秀夫

受賞論文 (8 件)

情報処理に関する学問体系 (展望)

田中幸吉

情報処理の主要問題論説

I. アルゴリズム (福村晃夫)

II. アーキテクチャ (元岡 達)

III. OS (和田英一)

IV. 言語 (中田育男)

座談会「情報処理技術の今後」

石井 治 (司会), 大須賀節雄, 小高俊彦, 戸田

巖, 野口正一, 水野幸男

㉘ 会誌編集委員会

榎本常務理事を委員長とする会誌編集委員会が主体となり編集を進めてきた。その構成は次の通りである。

担当常務理事 榎本 肇

担当理事 飯村二郎

委 員 志村正道, 吉村一馬, 小林光夫, 白井良明, 関本彰次
竹内都雄, 田村浩一郎, 戸川幸人, 星 守, 渡辺幸郎
原田寛一, 弓場敏嗣, 石原誠一郎, 木下 恂, 倉持恒忠
斎藤信男, 坂倉正純, 椎野 努, 杉本正勝, 武市正人
西原清一, 真砂雅彦, 山崎晴明, 堀田 弘, 斎藤久太
井田哲雄, 浦野義親, 銀治勝三, 高井 啓, 田中英彦
仲瀬 薫, 中野 治, 山本昌弘, 横井俊夫, 鈴木久子
池田嘉彦, 相曾益雄, 海老沢成孝, 小柳 滋, 田辺茂人
富田正夫, 八賀 明, 山本毅雄, 吉村彰芳

(2) 欧文誌「Journal of Information Processing」

① 欧文誌 Vol. 3, No. 3 を Special Issue: 20th Anniversary of IPSJ として 20 周年記念入賞論文を掲載する。

② 欧文誌 Vol. 4, No. 1 (1981) は IFIP Congress 80 の Post Conference Supplement を主体として構成するよう検討をすすめている。

③ 欧文誌編集委員会

欧文誌編集委員会が主体となって編集をすすめている。その構成は次の通りである。

前委員長 後藤英一
委員長 和田英一
副委員長 伊藤陽之助
欧文アドバイザー Joseph C. Berston, George Economos
委 員 相磯秀夫, 伊吹公夫, 浦 昭二, 大須賀節雄, 小野欽司,
亀田壽夫, 木村 泉, 田中幸吉, 棟上昭男, 長尾 真,
村上国男, 山田尚勇, 矢島脩三

7. 20 周年記念事業実行委員会

学会創立 20 周年に当る 1980 年 (昭和 55 年) に, 20 周年記念事業を行うことは, 第 179 回理事会 (昭和 50 年 7 月) で決定された。学会創立以来, 蓄積されてきた会員の研讃の結果を結集して, 情報処理の各分野における一層の発展に寄与してゆくことを目的としたのである。

第 185 回理事会 (昭和 51 年 2 月) では, 記念事業を企画してゆくために北川敏男会長を委員長として「20 周年記念事業委員会」が設けられた。

猪瀬 博君を委員長とする記念式典等実行計画委員会は, 式典等の記念事業の実行計画の素案をとりまとめ, 第 199 回理事会 (昭和 52 年 4 月) に報告し承認された。

(1) 目 的

この実行計画委員会の計画に基づいて記念事業を推進するため, 第 206 回理事会において, 「20 周年記念事業実行委員会」の設置が決定された。

実行委員会は, 創立 20 周年を記念して行う諸事業の実行を総合的に調整するとともに, 記念祝典の実施ならびに記念論文の募集・選考を行うものであり, 関係する事業は次の通りである。

ア 記念祝典, イ 記念大会, ウ 記念論文,

エ 記念出版, オ 記念会誌

(2) 実行委員会の構成

実行委員会の構成は, 下記の通りである。

委員長 猪瀬 博 (東大)
副委員長 相磯秀夫 (慶大)
(副会長) 坂井利之 (京大)
(副会長) 高橋 茂 (筑波大)
委 員 総務委員会 佐川俊一 (国鉄)*, 藤中 恵 (日立通信),
嶋村和也 (三菱)
(理 事) 河野隆一 (三菱)
財務委員会 石井善昭 (日電)*, 井上誠一 (国際電電)
(理 事) 木村 豊 (日電)
(理 事) 平澤誠啓 (日電)
祝典委員会 石井 治 (電総研)*, 大前義次 (日電)**
長尾 真 (京大), 川端久喜 (日立)
(理 事) 近谷英昭 (国鉄)
記念論文選考委員会 相磯秀夫 (慶大), 山田 博 (富士通研),
中田育男 (筑波大)
(理 事) 榎本 肇 (東工大)**
記念大会行事委員会 中込雪男 (国際電電), 山本欣子 (情報協)**
(理 事) 澤田正方 (国鉄)**
(記念会誌委員会) 高島堅助 (阪大)
〔注〕 *各委員会の主査 (記念事業関係組織との連絡担当)
*1: 新版情報処理ハンドブック委員会
*2: 記念会誌編集委員会
*3: IFIP 80 実行委員会
*4: 記念大会委員会

なお, 副委員長大野 豊君は副会長としての任期満了により, 委員伊藤宏君は転任に伴って交替した。

8. 所要経費

所要経費としては, 800 万円の予算を見積り, これには, 50年度末より 3 年間にわたり毎年積立てた「20 周年記念事業準備金」を当てることとした。現時点における収支の中間報告は別表の通りである。

記念論文の受賞者に対する IFIP 関連の支払をまだ行っていないために中間報告としてあるが, 今後特に変えることはないものと思われる。

したがって, 予備費 90 万円を含む 800 万円の予算額に対し, 決算額は 6,175 千円となっており, 1,825 千円の節約となっている。

これは,

ア 諸経費の節約に努めたこと

イ 特に祝典関係費を切下げるよう努めたこと

ウ IFIP 80 豪州大会への渡航費が見込より安かったこと

などによるものである。

20 周年記念祝典収支中間報告

55.6.19

項 目	予 算 額	決 算 額
1. 記念式典祝賀パーティ (①—②)	4,500,000	3,914,971
① 支 出	4,800,000	4,339,971
会場使用料、パーティ経費	3,150,000	2,819,000
記念ネクタイピン	1,000,000	994,000
表彰記念品代	200,000	192,400
通信費	150,000	116,200
その他雑費	300,000	218,371
② 収 入		
パーティ会費等	300,000	425,000
2. 記念講演・特別講演	100,000	50,000
支 出		
講師謝金	100,000	50,000
3. 記念論文	2,500,000	2,210,400
支 出		
入選論文著者への参加負担金	1,800,000	1,320,000 ^{*1}
佳作 " 登録負担金	250,000	416,000 ^{**}
表彰記念品代	400,000	369,200
その他雑費	50,000	105,200
4. 予 備 費	900,000	0
総 計	8,000,000	6,175,371

*1 1,320,000 = 330,000 × 4

** 416,000 = 52,000 × 8

○各省庁大臣祝辞

祝 辞

文 部 大 臣
谷 垣 専 一

本日ここに社団法人情報処理学会創立 20 周年記念式典が
挙行されるに当たり一言お祝いのことばを申し述べます。

本学会は昭和 35 年 4 月国際情報処理連合 (IFIP) への日本
を代表する学術研究団体になるとともに、情報処理に関する
学問技術の進歩向上と普及を図ることを目的として創立さ
れ、昭和 38 年には社団法人情報処理学会となり一段と学会
活動の進展が図られました。

以来、本学会は研究発表会、学術講演会、国際交流等、数
多くの事業に著しい業績をあげるとともに、また会員の中
から優れた研究者を多く輩出するなど活発な活動が続けられ
今や会員の数が 14,000 名を超える我が国有数の学会に発展
しました。この時にあたり、創立 20 周年記念式典が挙行さ
れますことは今後の情報処理の各分野における飛躍的な発展
を期する上からも誠に慶賀に堪えません。

我が国は今日科学技術の飛躍的な発達を基盤として高度工
業化社会の一員に成長するに至り、著しい産業の発展と国民
生活の向上とは世界各国から注目されるところとなりました
が、これはひとえにこれを支える基礎的な学術研究の進歩発
展の賜であり、なかならず電子計算機および情報処理につ
いての研究開発、ならびにその広範な社会的応用の果たした役

割は尽大と考えております。

近年における学術情報は学術研究の著しい発達に伴って量
的に急激な増大を示しているとともに、学問分野の専門分化
や学術的研究の発展によって質的にも多様化しております。
学術を振興し優れた先駆的独創的な研究の展開を図るため
には、世界の最新の学術情報を常時的に迅速に入手利用し得
るようにすることが昨今における不可欠な基盤的条件となっ
ています。更に学術情報が高度な知的活動の所産であり、我が
国の社会、経済、文化の発展にとって貴重な資源であること
から、その効率的利用のための学術情報流通体制の整備は、
学界をはじめ広く社会の各方面から強く要望されてきてい
るところであります。

文部省におきましてこの重要性にかんがみ、新しい学術
情報システムの在り方を検討し、情報処理の知識技術の成果
を活かして全国的な学術情報ネットワークの実現を目指し
ているところであります。

今後の我が国の将来を見通します時、一層知識集約型社会
への道を歩むものと思料されますが、その根底に情報処理の
知識技術の発展が重要な意味をもつと思われます。

国際的にも近時この分野の研究開発の進展は目覚まし
いものがあり、トランジスタから超高度集積回路に至る半導
体素子の進展の例をとってみても、情報処理の研究開発は数
年にして新しい世代を画するといわれております。このよう
な状況を背景として、会員各位の御活躍に対する国民の期待
も大きいものと確信いたします。

本学会創立 20 周年の記念式典が挙行されるに当たりこれ
までの輝かしい業績をたたえ、改めて深甚の敬意を表します
とともに、今後とも学問の進展を支えるため活発な活動を続
けられ、一層の御発展を御期待いたしましてお祝いの言葉
といたします。

祝 辞

国務大臣、科学技術庁長官
長 田 裕 二

本日ここに情報処理学会創立 20 周年記念祝典が挙行さ
れるにあたり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

我が国は従来から国民生活の向上と社会経済の安定的な発
展を目指して科学技術の振興を図って参りました。今日我が
国の内外の厳しい社会経済情勢の下で、資源・エネルギーの
確保をはじめとする困難な課題に直面しておりますが、国土
が狭小で資源に乏しい我が国が、これらの課題を解決し長期
にわたり安定成長を遂げてゆくためには自主技術開発力を強
化し、科学技術立国を志向してゆくことが緊要であり、1980
年代の我が国の命運は科学技術の振興にかかっていると言
っても過言ではありません。

さて、近時コンピュータを始めとする情報処理技術はめざ
ましい進展を遂げ、情報処理機器の大幅な性能向上のみなら
ず、これらを他の分野に適用して広範多様な応用技術の進展
をみ、1970 年代の新技术の全般的停滞傾向のなかでも科学技
術のブレークスルーをもたらした原動力として、我が国の科
学技術の進展に大きな貢献を行って参りました。

情報処理技術は、まだまだこれからの分野であり、国全体として総合的な科学技術の振興を図る上でも特に重要な分野として、私ども科学技術行政に携わるものとしても今後積極的にこれを促進していく必要があると考えております。

また、研究開発活動の活発化・効率化のためには、科学技術情報を収集、整理し、これを迅速かつ的確に提供することが極めて重要であります。

このような観点から、我が国においては「科学技術情報の全国的流通システム (NIST)」の構想の下に、日本科学技術情報センターをはじめ関係各機関の協力を得て科学技術情報の流通体制の整備を行っているところでありますが、この体制整備を進めるに当たって、コンピュータを中心とした情報処理技術の研究開発は、情報の迅速かつ的確な流通を促進するものとして今後とも重要な役割を果たすものと考えられます。

このような意味におきまして、情報処理学会が 20 年前、情報処理に関する学術、技術の進歩発展を図ることを目的として発足して以来、幾多の困難を克服し、数々の優れた業績により我が国の情報処理技術の発達に大きく貢献され、今や一万四千余名の会員を擁する我が国の代表的な学会の一つに発展されましたことは、誠に意義深く、これまでの御努力、御功績に対し深く敬意を表する次第であります。

情報処理学会におかれましては、今後とも情報処理技術の振興、我が国における科学技術情報活動の発展、ひいては科学技術の発展に御尽力いただきますようお願いいたしますとともに、情報処理学会の今後益々の御発展を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

祝 辞

通商産業大臣臨時代理
国務大臣 正 示 啓次郎

本日ここに情報処理学会の創立 20 周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

御承知のとおり、我が国における情報化は、着実に進展し、コンピュータは単に産業分野のみならず広く国民・社会生活のあらゆる分野に浸透するに至っております。今やコンピュータなしの生活を想像することは困難なほどコンピュータは、高度化・複雑化した社会の中核神経としての役割を果たしております。

このような情報化の進展に伴い、我が国における情報産業も目覚ましい発展を遂げ、コンピュータ産業は今やその生産額 1 兆円の大台を超える重要産業にまで成長するとともに、情報処理産業も情報化推進の先導役として、急速な成長を遂げております。これら情報産業は、省資源、無公害、高付加価値の知識集約産業の典型として産業構造高度化の中核を担う戦略産業であり、通商産業省といたしましてもその振興に全力を投じているところであります。技術進歩の極めて激しいこの情報産業分野において、貴学会が情報化の進展と情報産業の発展に果たしてこられた役割は高く評価されるべきものと考えます。

貴学会は、昭和 35 年の設立以来一貫して学術、技術の進

歩発展に貢献され、着実な歩みを続けてこられました。創立 20 周年を迎えた本年において、アジア地域で初めて第 8 回世界コンピュータ会議が、貴学会の主催により東京において開催されることになりましたことは、極めて意義深いことであります。

また、口頭から貴学会は、情報処理関係の標準化活動においても、我が国の中核的役割を果たされてこられました。このような活動には、情報化の推進と情報産業の振興をつかさどっております通商産業省といたしましても期待するところが極めて大きく、今後とも我が国の情報化の進展のため御協力をお願いしてまいりたいと考えております。

我が国の情報化推進のため、貴学会がその社会的使命を十分果たしたうえ、ますます発展されることを祈念いたしまして私の挨拶といたします。

祝 辞

郵政大臣
大 西 正 男

本日ここに情報処理学会の創立 20 周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

創立 35 年 4 月に貴学会が創立されて以来、この 20 年の間に我が国は世界第 2 位の生産力を有する工業国に発展いたしました。この背景には技術革新の基礎となる学術研究の果たした役割を忘れることはできません。特に電子計算機および情報処理の分野の発展には目覚ましいものがありますが、この分野において貴学会は誠に大きな役割を果たされてきたところであり、会員をはじめ関係各位の御努力御精進のたまたものと深く敬意を表する次第であります。

今日世界的な資源不足等を背景に省資源省エネルギーが叫ばれ、知識集約型産業構造への転換が強く要請されております。電子計算機および情報処理の分野は正にそれを可能にする分野であり、これからの我が国における成長分野として大きな期待がかけられております。私がその行政を預かっております電気通信分野におきましては、データ通信、光通信、衛星通信など多様化する社会ニーズに応じた諸技術の開発をはじめとして広範な研究開発が進められておりますが、中でも電子計算機および情報処理に係る研究開発が極めて重要な地位を占めるものとなっております。さらに 80 年代の情報化社会を展望いたしますと、貴学会の活動に対しますますます大きな期待が寄せられるものと考えます。

今後とも貴学会におかれましては、その使命を十分果たされますよう一層の御努力御精進をお願い申し上げる次第であります。

終わりに情報処理学会の限らない御発展を祈念いたしまして私の祝辞といたします。

○記念祝賀会における来賓の祝辞

お 祝 い の 言 葉

日本学術会議会長
伏 見 康 治

本日、情報処理学会創立 20 周年を迎えられ、盛大な記念

式典を挙行されましたことを日本学術会議を代表して心からお祝い申し上げます。

御承知のように、世界における情報処理工学の発展ぶりを見ますと、近年は特に加速的にさえ感じられ、誠に「目覚しい」と申すほかありません。情報処理工学会のこの20年を省みますと、国内におけるコンピュータ技術の発展に大きく寄与されたことはいうに及ばず、世界的にも顕著な業績を挙げられて、御隆盛の一途を辿ってこられましたことは、ひとえに関係者各位の卓抜な先見性および創意と熱意にみちた御努力によるものと深く敬意を表する次第であります。

今日、情報処理の学問・技術は、学術・産業のあらゆる分野に浸透して、必要不可欠の要素となりつつあり、多くの課題を解決する鍵をにぎっているといえましょう。ここに斯学の向上発展の将来を強く期待する所以であります。

日本学術会議としても、本年10月開催の第8回世界コンピュータ会議を後援し、あるいは、従来より同会議に代表を派遣するなど、貴学会との密接な協力のもとに情報処理工学の進展のために努力を続けております。特に今期は、科学における創造性と先見性の尊重を重点目標の一つとし、我が国の科学技術一般の発展向上のため積極的な活動をいたしております。創造性と先見性を特に必要とする情報処理工学へ、何らかの寄与をこの面からもなし得ることを期しております。

終りに、情報処理工学会が、今後とも情報処理工学の振興に大きな役割を果たされることを衷心より希望いたしますとともに、一層の御発展をお祈りしてお祝いの言葉といたします。

お祝いの言葉

日本電信電話公社総裁
秋 草 篤 二

情報処理工学会が、情報処理に関する学問と技術の研鑽、交流の場として創立され、本年目出たく20周年を迎えられたことを心からお喜び申し上げます。

この間、情報処理技術の研究と普及にたゆまぬ努力を傾注され、会員数におかれましても14,000名を超える大きな学会に発展され、情報化社会の推進に大きな役割を果たされていることに深く敬意を表する次第であります。

現在は、技術革新の時代といわれておりますが、めざましい情報処理技術の進展は、経済の発展をもたらす、国民生活をより豊かにするとともに、国際交流の一層の緊密化を実現する有力な手段を提供しているところであります。

また、情報処理技術を背景とした情報処理産業は、今後、我が国の中核を構成する基幹産業に成長するものと期待されております。

私共、電電公社におきましても、情報処理分野の発展に寄与することは、極めて意義あることと考えているところであります。

情報化社会の新たな飛躍に対する電気通信サービスの多様化、高度化へのニーズは極めて高いものがあり、これに対応するためには、電気通信技術と情報処理技術の融合した新た

な通信システムの発展が不可欠であるとの考えから、電気通信網の整備に努力してきたところでありますが、今後、さらに、超LSI、光ファイバ、デジタル信号処理等の先端技術の研究、実用化に一層力を注ぐとともに、デジタル交換網の拡充、データ通信網アーキテクチャの確立を図り、電気通信サービスに対する社会の要請に積極的に応えて行く所存であります。

電気通信事業の発展に対しましても、英知に満ちた情報処理工学会関係各位の御指導、御協力を賜われれば幸いです。

今後、情報処理分野における学術、および産業が隆盛を極めることは、万人の認識しているところでありますが、これに伴う諸問題も、より顕在化するものと考えられ、情報処理工学会の果すべき社会的使命は、今後、さらに、増大することでありましょう。

情報処理工学会が、ますます発展し、会員諸氏のご研鑽により、情報処理の基本問題が一つ一つ解明され、より一層社会の発展に貢献されることをご期待申し上げまして私のあいさつといたします。

お祝いの言葉

(社)日本電子工業振興協会会長
小 林 大 祐

本日、ここに社団法人情報処理工学会の20周年記念祝賀会にあたり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

昭和35年に、わが国における情報処理の学問、技術進歩向上のために貴学会が発足され、以来20年にわたり歴代会長を始め役員各位のご尽力により、極めて多くの成果をあげられましたことは、関係するものとして敬意にたえないところであります。

われわれ電子計算機業界におきましても、技術の確立、国産メーカのグループ化、パターン情報処理の開発、超LSIの開発など、一步一步前進してまいりましたが、この間における貴学会の表裏にわたるご指導、ご支援に対しましては業界一同感謝しております。しかし、なお、今後の課題としてソフトウェア、マンマシン・インタフェースなどがありますので、従前にも増してご教導賜りますようお願い申し上げます。

かえりみますと、貴学会発足当初は事務局を当電子協の中に設けられ、当協会も表裏に亘ってお手伝いさせていただきましたことは、甚だ光栄に存じますと共に、産学協調の実を挙げるのに誠に適切であったかと存じます。

この方面の学問の進歩は誠に著しいものがあり、今後ますます加速するものと考えられますので、関係各位の一層のご努力により貴学会の一層のご発展を祈念致しまして、お祝いの言葉といたします。

〔備考〕

IFIP 会長 Bobillier 氏の挨拶(英文)は会誌「情報処理」第21巻5号、20周年記念特集号423ページに掲載。